
禁煙するということ

山口春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

禁煙するということ

【Nコード】

N1890K

【作者名】

山口春

【あらすじ】

簡単な口約束で、彼女を傷つけたことに築く青年。

彼を信じるため、彼から離れる彼女。

約束って、一体なんなんだろう。

なんでもない日常の、ちょっとした話。

「お前この間タバコやめるって言ってなかった？」
喫煙室ではこの手の話が毎日繰り広げられる。あれだ。おはよう、
みたいなものだと思う。

午前、午後、深夜問わずコミュニケーションと仕事の合間の合法的な休憩のため、僕達はタバコを吸っているわけだけれど、中には本当にやめなきゃいけない人が堂々と喫煙室に入ってきたりして、でもそういう人には逆に誰もやめると言ったりはしない。きつと、挨拶しても返事しないのが分かっているからとか、挨拶自体が苦手だったりとか、そういうのと似ているんだと思う。箱にも細かいことまで書いてあるわけだし、わざわざ言わなくてもいいかな、なんて感じ。だから、やめる云々の話は、やめる気がない人たちの間でしか成立しない。僕はそう信じている。現に、僕がそうだからね。
「言ってみましたっけ？」

「言ってたよ。2ヶ月くらい前。なんでだっけ？」

「ああ分かった。彼女にやめろって言われたからだ」

そんな理由じゃ無理だよな。っていうか、理由になってない、と、先輩が2本目のタバコに火をつける。

一度の休憩でタバコは二本までというのが、誰が決めたわけでもないのにこの喫煙所でのルールになっている。

「ですよね、しかもそれ以来タバコの話全くしないんですよ。目の前で吸っても何も言わないし、それなら別にいいかってね」

「まあ、やめる時は自分で決めるってのな」

「そうですね。この会社にいる間は無理な気がしますけど」

と、僕も2本目に火をつけた。新商品のマルボロは、長年吸っていた箱の色を変えさせる可能性を持っていた。タバコに味なんてあるのかよ、と、中学生のときにぼんやりと友人に聞いたあの日をなぜか突然思い出し、僕は僕に「あるんじゃない？」と答えた。

「でも、俺、一個やってみたいやつあるんだよ」

「なんです？突然そんな漫才の始まりみたいな話しだして」

僕は、自分のタバコから昇る煙を見ながらぼんやりと聞き返す。先輩は声色を変えて話し出す。モノマネのつもりなんだろう、似てないけど。

「禁煙、破っちまったな・・・って言うって、死に際にタバコをくわえるんだよ。そのためには禁煙しとかなきゃいけないだろ？」

「死に際？いつからいつまでやめてて、どれくらい久しぶりに吸う設定なんですか？」

「1週間ぶり」

「寿命で死ぬ一週間前って、そんなもん医者に止められてますよ」
「だよな、と言いなながら先輩はついうっかりルールを犯しそうになつて、慌てて取り出したそいつを箱に戻した。」

「だからさ、かつこいい死に方しなきゃいけないんだよ。なんだろう職とか？」

「殉職した方に失礼だし、僕達、ただのサラリーマンです。殉職って、過労死ですか？なくはないけど、やです。」

「だよなあ。やっぱ禁煙は別にいいか」

「ですね、と、僕は先輩を置いて先に喫煙所を出る。」

先輩が、結局胸ポケットからさつき仕舞ったタバコを取り出すのが、ドアの隙間から見える。禁煙、破っちまったなって、約束破ってんだから、別にかっこよくはないよなあ、と、僕はだから職場に戻る廊下でそんなことを考える。そうだ、約束破ってまでタバコを吸ったこと自体、微妙じゃないか。できない約束はしちやいけな
いよ、うん。

そんなことを考えたせいかどうかは分からないけれど、家に帰ると彼女が珍しく部屋で僕を待っていた。足元にはでかいドラムバッグ。そして、

「やっと帰ってきた。お疲れ様。それじゃ、さよなら」

と言って、立ち上がった。僕は、うん、と言いつつになつて、その時やつと状況の異常さに気付いた。

「どこ行くの？」

「あなたには教えない。今日でお別れ。わかった？」

分からない、と、僕は彼女の腕を引く。彼女は特に力を入れず、なのに簡単に僕の腕を解いた。

「今日で2ヶ月なの。私がタバコをやめてつて言つてから。あなたはうん、つて言つた。でも2ヶ月たつてもやめなかつた。だからお別れ」

「ちよつと、僕、やめるとは言つてないよ」

「言つた。いいの、あなたは覚えてなくても私は覚えてる。じゃあ

そんな勝手な、という僕を制して、彼女は続ける。

「約束を破らない、つて言つたのは誰？付き合つたときにあなたが言つたの。でも、破つたでしょ？あなたが裏切つたの、私とあなたを。だからお別れね。次は約束を破つても怒らない彼女を捜して」
そう言つて、彼女は玄関を颯爽と抜けていった。なんだかドラマみたいだな、と僕は他人事のように玄関を見つめる。そしてまた、中学生の僕が口を開く。

「たつた2ヶ月で別れるつて、そんなんで相手の何が分かるんだよ。赤ん坊の首も座んないくらいの期間でさ」

「あるんじゃないね？」

と、僕は今度は声に出して答える。そして胸ポケットから箱を取り出す。箱の中には、空気がほんの一箱分。

「だから、ソフトの方がいいんだよ。ないならないつて言えよな」
誰もいない部屋に、僕の声だけが響く。タバコつて、本当に吸いたいとき、なくなつていくことが多いのはなぜなんだろう。窓の外を見つめて、本当は考える必要がなくなつていくべきだった問いを、僕は煙のように吐き出した。

「そりゃ、お前が悪いよ」

友人は、うまそうにセブンスターをくわえながら僕を嗜めた。

「やめろって言われてて、言ったらさ、お前がやってたことって忘れてたも同然のことじゃん。そら彼女もいらつくんじゃない？」

「2ヶ月って、誰が決めたんだよ」

「彼女だろ？そういう話もしてなかったわけでき、そういうの含めてお前が悪いんだって。な？あれだ、ドンマイ！」

久しぶりに会うのに、友人はずかすか僕を踏みつける。そして、意外と傷ついているのか僕は、と、友人の言葉で事実によつと気付く。

「お前さ、別にいいけど、大学の方がこういう話多いんじゃない？」

「ん？知らね。俺大学行ってないし」

いやいや、3留する気か？と言う僕に、彼は人懐っこい笑顔を返す。それが逆に恐ろしい。

「まあでも、男も女もいくつになってもガキな所はあるからさ。そこをうまーくね。ほら、そういうのお前得意じゃん。やればいいんじゃないかね？」

「なに？お前の彼女はタバコやめるとか言わないの？」

言わない、と、彼の右手が僕の串カツを奪い取る。自分の分を食べないのは、きつとさめてしまったからだ。調子に乗ってまとめて注文するからだよ。

「つつか、タバコ屋の孫がタバコやめろって、ただのギャグでしょ。言わせねえよ！つって」

「そうか、相手の問題か」

というと、友人が珍しく真面目な顔で僕を見た。

「違っつしょ。きちんと話してないお前の問題だっつうの。分かってんの？」

折角かっこいいことを言ったのに、口から串カツの衣が飛び出した。でも彼はそんなこと気にしない。

「やめるもやめないも、好きも愛してるも口に出さなきゃわかんねえんだって。言ったか？言っていないだろ？なあなあじゃ伝わんねえ

よ。俺らだつてさ、こうやってバカみたいに色々しゃべってっからまだ友達やれてんだろ？」

「そうだね。そうかもしれない。随分とサボった気がするな、そういうの。ところでさ、お前俺の串カツ食うなよ」

「そうそれ！それを彼女にも言えばよかつたつてわけ！分かつた？俺のつまみ食いのおかげか、よかつたよかつた」

彼は笑つて、追加のビールを注文する。あれくらい正直だと、彼女も心配しないのかな、それとも逆に心配なのかな。僕には分からない。

「今日何時まで飲む？」

彼がそんなことを聞いてきたということは、そろそろ帰らなければならぬ、ということの意味している。僕は時計を確認し、あと30分かな、と伝えようとして、彼の携帯が光っていることに気付いた。

「それ、光ってる。いつもと違う色で」

ん？やべ！と、彼は玄関に走る。彼女の呼び出しだろう。うらやましい話だな、と僕は会計のために店員を呼んだ。これくらいの値段なら、おごりでもいいか。

「すまんな。帰るわ。迎えに来るってよ。こわいねえ」

「しっかり管理されてるね。いいことだよ、どうせ4月には向こうに戻るんでしょ？」

僕が聞くと、彼は照れくさそうに笑った。

「実はまだ決めてなくてさ、親とも相談してんだけど」

「大学辞めるの？まさか、お前が主夫つてオチ？」

いや、そうじゃないんだ。と、彼が珍しく財布からお札を出して僕に渡した。

「お、割り勘？なんかいいことあった？」

「いいことはないけどさ、まあ、いいじゃん」

靴を履き、会計を済ませる間も、彼は妙にニヤニヤしていて気持ち

悪い。随分と気になる話し方をしてくれるもんだ。

居酒屋の暖簾をくぐり、僕は右、彼は左を向く。そして、結局我慢できず、僕は彼を呼び止めた。

「なあ、4月からどうするんだよ？」

彼はタバコに火をつける。

「夢ってのはな、叶いかけたくらいに話すのがちょうどいいんだよ」
そう言つて、昔と変わらない笑顔で僕を包んだ。約束つてのは、一度言つたら守らなきゃいけない。そういうことと、同じなのかな。

「じゃあ、またその時間くわ。でもさ、それ」

「そう、コブクロ。あいつ毎日聞くから覚えちゃった、じゃあな！」
駆け出した彼はすぐに闇と雑踏の中に消えた。ここから彼の家までは歩いて1時間はかかる。迎えは車か。いいなあ。僕は腰を丸め、家に向かう。残念なことに、僕の家はここから歩いて15分。歩くには遠く、考え事をするには短い時間の中で、僕は彼女の言葉を何度も反芻した。

家中を掃除しても、彼女のものは何一つ出てこなかった。完璧すぎて感心してしまう。僕は大掃除を終えて疲れた体をソファーに沈ませ、彼を箱から呼び出した。彼は素直にそれに答える。

「なあ、大事な約束だったみたいだね」

僕は一人でそんなことを呟く。返事はない。

「つまり、お前のせいじゃなくて、僕のせいなんだな。適当にしていたから、一人失つて、お前が残った。それってどうなんだ？お前もなあなあで吸われてたくないよな」

ジジ、と、紙が激しく燃えた。それが返事なのかもしれない。

「やめたほうがいい？お別れだけど？」

当然、答えはない。僕はなんだかむなしくなつて、そのタバコを少し乱暴に消した。煙は余韻を残し、壁に吸い込まれていく。静かな世界。

僕はまだ10本以上残るタバコの箱をつかむと、真っ直ぐゴミ箱へ

向かい、捨てた。

「君らには謝るよ、ごめん。でもさ、ちょっと何か、しっかり決めなきゃいけない気がしたんだ。じゃあね」

うまくお別れができたとは思えなかった。納得はできていなかった。でも、何か決めるってきつとこんなことなんだと思う。すると、携帯がなった。友人からだ。

「なあ、彼女がさ、お前に友達紹介した言っただけだけど、どう？」

僕は思わず笑ってしまう。そして、「もう少ししたらね。ありがとう」と返す。彼なりの気遣いだろうけど、まだいいや、と単純に思う。そして携帯を閉じようとしたとき、入れ替わりでメールが届いた。

「今日捨てたゴミの中に、もし、吸いかけのタバコがあるなら、このメールに返事を返してきて。捨てた箱が空箱なら、アドレスごと消して。まあ、分かっててメールしてるあたり、私もバカだな、と思う。あなたもこれくらい私のことを考えてくれたらすねたりしないんだけど」

僕はそのメールを3度読み、色々な可能性を払拭した後、携帯をソファーに置いた。そして10分ほど考えて、きつと順番は違っただろうけど、友人に電話をかけた。友人は2コールでそれに答える。

そして、開口一番、

「お！このタイミング！お前、よかったな」

と病的に勘のいい言葉で僕を迎えた。

「いや、まだ分からないよ。これから勝負だ。きちんと話してくるよ」

「おう、好きなAV女優について熱く語ってこいよ！」

と、友人が言ったので、正直に企画物が好きだと言うと、彼は電話口でむせるほど笑った。

「大丈夫そうだな。じゃあな！」

と、電話はきれいに切られ、僕はそのまま彼女にメールをした。な

ぜだか文章は簡単に決まった。正直ってこういうことなのかもしれない。つまり、

「ありがとうございます、頑張ります」

ってことだ。できるかどうかなんて分からないけれど、できそうになかったらきちんと言をしてみよう。努力はしてみよう。それも見てもらおう。きっとそれだけなんだ。

彼女の返事は、それから20分後、チャイムの音と同時にやってくる。

「いいえ、こちらこそ。で、ドア開けてくれない？荷物が多くてさ」
僕の足音がパタパタと、それに応えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1890k/>

禁煙するということ

2010年10月28日07時26分発行